

【A年】待降節第2主日(2024年12月8日)

【旧約聖書日課】イザヤ書 59章12～20節

- 12 御前に、わたしたちの背きの罪は重く
わたしたち自身の罪が不利な証言をする。
背きの罪はわたしたちと共にあり
わたしたちは自分の咎を知っている。
- 13 主に対して偽り背き
わたしたちの神から離れ去り
虐げと裏切りを謀り
偽りの言葉を心に抱き、また、つぶやく。
- 14 こうして、正義は退き、恵みの業は遠くに立つ。
まことは広場でよるめき
正しいことは通ることもできない。
- 15 まことは失われ、悪を避ける者も奪い去られる。
主は正義の行われていないことを見られた。
それは主の御目に悪と映った。
- 16 主は人ひとりいないのを見
執り成す人がいないのを驚かれた。
主の救いは主の御腕により
主を支えるのは主の恵みの御業。
- 17 主は恵みの御業を鎧としてまとい
救いを兜としてかぶり、報復を衣としてまとい
熱情を上着として身を包まれた。
- 18 主は人の業に従って報い
刃向かう者の仇に憤りを表し
敵に報い、島々に報いを返される。
- 19 西では主の御名を畏れ
東では主の栄光を畏れる。
主は激しい流れのように臨み
主の霊がその上を吹く。
- 20 主は贖う者として、シオンに来られる。
ヤコブのうちの罪を悔いる者のもとに来ると
主は言われる。

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙 16章25～27節

- 25 神は、わたしの福音すなわちイエス・キリスト
についての宣教によって、あなたがたを強めること
がおできになります。この福音は、世々にわた
って隠されていた、秘められた計画を啓示するも
のです。26 その計画は今や現されて、永遠の神の命

令のままに、預言者たちの書き物を通して、信仰
による従順に導くため、すべての異邦人に知られ
るようになりました。27 この知恵ある唯一の神に、
イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくあ
りますように、アーメン。

【福音書日課】マタイによる福音書 13章53～58節

53 イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこ
を去り、54 故郷にお帰りになった。会堂で教えて
おられると、人々は驚いて言った。「この人は、
このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たの
だろう。55 この人は大工の息子ではないか。母親
はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、
ユダではないか。56 姉妹たちは皆、我々と一緒に
住んでいるではないか。この人はこんなことをす
べて、いったいどこから得たのだろう。」57 この
ように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、
「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間
だけである」と言い、58 人々が不信仰だったので、
そこではあまり奇跡をなさらなかった。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 59章12～20節

- 12 私たちの背きの罪はあなたの前に多く
私たちの罪が不利な証言をする。
私たちの背きの罪は私たちと共にあり
自らの過ちを、私たちは知っている。
- 13 主に背いて欺き
私たちの神に背を向け
虐げと反逆を語り
心に偽りの言葉を抱き、それを口に出す。
- 14 公正は後ろに退けられ、正義は遠くかなたに立つ。
真実は広場でつまずき
正しいことは入ることができない。
- 15 真理は失われ、悪から離れた者も略奪される。
主はこれをご覧になり
公正がないことを不快に思われた。
- 16 主は人のいないのを見
執り成す人がいないことに驚かれた。
そこで、主はその腕で自らに勝利をもたらし
その正義でご自身を支えた。

17 主は正義を鎧として身に着け

救いの兜を頭にかぶり

報復の衣を身にまとい

妬みの上着で身を包まれた。

18 主は仕業に応じて報い

敵対する者には憤りを

敵には報復を

鳥々にも報復を返される。

19 西では主の名を恐れ

東では主の栄光を畏れる。

主は激しい流れのようにやって来る。

主の息吹がそれを押し流す。

20 贖い主がシオンに来る。

ヤコブのうちで

背きの罪から立ち帰る者のもとに来る

——主の仰せ。

ローマの信徒への手紙 16章25～27節

25〔神は、私の福音すなわちイエス・キリストについての宣教によって、あなたがたを強めることがおできになります。この福音は、代々にわたって隠されていた秘儀を啓示するものです。26その秘儀は、すべての異邦人を信仰による従順へと導くようにとの永遠の神の命令に従い、今や預言者たちの書物を通して明らかにされ、知らされています。27この知恵ある唯一の神に、イエス・キリストを通して栄光が世々限りなくありますように、アーメン。〕

マタイによる福音書13章53～58節

53 イエスはこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、54 故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と力をどこから得たのだろうか。」

55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアと言ひ、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 姉妹たちも皆、私たちのところにいるではないか。この人はこれらすべてのことを、一体どこから得たのだろうか。」57 こうして、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言ひ、58 人々の不信仰のゆえに、そこではあまり奇跡をなさらなかった。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・12月8日「待降節第2主日」の日課主題は「旧約における神の言」。

・旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、救いを妨げるものに対する嘆きを歌う箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、書簡末尾に置かれた神を賛美する頌栄句。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、故郷ナザレで受け入れられない主イエスの姿を伝える箇所。

旧約日課(イザヤ 59章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。概要については、前回資料「聖書と祈りの会 241127」も参照。日課箇所は、「第二イザヤ」として扱われる本預言書後半部(40～66章)の一部。なお、一部の学者は、「第二イザヤ」をさらに二つに区分して、56章以下を「第三イザヤ」と呼ぶ別の編集者の手によるものとして扱うことがある。

・日課箇所を含む「第二イザヤ」(あるいは「第三イザヤ」)は、39章までで明示されている前8世紀の時代背景とは異なる時代、すなわち前6世紀バビロン捕囚期以後の時代を背景としていと考えられている。その重要な根拠は、前539年にバビロニア王国を滅ぼしてオリエント世界の覇権確立の端緒を築いたペルシア王「キュロス」に触れられていることにある(イザヤ44:28、同45:1など)。ペルシア王キュロス(在位＝前559～530年頃)は、即位して間もなく当時の東方の大国メディアを併合すると、西方アナトリアの大国リュディア王国を攻略(前546年頃)、前539年にはバビロニア王国の首都バビロンを無血開城で征服して同王国を滅亡させ、広くオリエント世界の覇権を確立した。さらに、キュロス王の後を継いだカンビュセス王(在位＝前530～522年頃)は、前525年にエジプトを征服し、ペルシア王がファラオを兼ねる支配を確立、当時のオリエント世界のほぼ全域に対して統一的な支配を実現した。このペルシア帝国の統一的支配体制を確立したのが、続くダレイオス王(在位＝前522～486年頃)である。ペルシア帝国の支配は、アッシリア時代から続くアラム語を公用語とする方針を継承したほか、納税制度を基軸とした「サトラップ制」と呼ばれる行政制度を前提に民族や宗教の自治を広範に認める寛容政策でも知られる。この時代のペルシアの宗教は「ゾロアスター教」として知られるようになる体系がほぼ成立しており、神像を用いない主神「アフラマズダ」を絶対神と位置づける一方で、他の伝統的な神々を含めた神的世界を説き、善悪二元論と終末論に基づく世界観に特徴があったとされる。このような宗教性は、続く時代に普遍主義的な一神教として展開していくユダヤ・キリスト・イスラム各教の宗教思想において広範に前提として受け継がれている。

・「第二イザヤ」前半部(40～55章)には、特徴的な「主の僕」と呼ばれる者が繰り返し描かれており、特に53章で描かれる「僕」が「苦難の僕」として描かれているが、後半部(56章以下)にも、この「僕」と思われる者を示唆しながら展開する預言が繰り返されている(57:1など)。この「僕」を「第二イザヤ」の中でどのように位置づけ、解釈するか、議論は尽きていない。この「主の僕」の描写がされる背景では、断食などの宗教実践にも関わらず社会的な不正義がはびこる現実の中で「主」の働きに懐疑的になる者に対して、なお「主」の「恵みの業」の実現を期待できるのかという問いが繰り返し展開されている。この問いに対して、やはり繰り返し断続的に提示されるのは、すべての者を支配する絶対的な「主」の「恵みの御業」が必ず実現するときに来るという期待であり、これが終末論的な言説によって示されるのである。

・日課箇所については、9～15節前半が「嘆きの歌」、15節後半～20節は「主の応答」という様式で構成されている。釈義家の多くは、この「嘆き」がイスラエルの罪に注目しているのに対して、「応答」が諸国の罪にまで視野を広げているように見られるとして、主題の一貫性に欠け、釈義上の困難があるとす。しかし、バビロン捕囚からペルシア支配時代にかけて、預言者の宗教世界観は普遍化を進めており、視座は常に「ユダ・イスラエル」を超えたところに据えられている。

使徒書日課(ローマ 16章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。本書の概要については、前回資料「聖書と祈り 241127」等も参照。

・日課箇所は、本書簡の最末尾に置かれた賛美頌栄句である。本書簡は、15:14以下16章にかけて長大な「末尾の挨拶」を置いており、それに続く賛美頌栄句(日課箇所)も長く、これらのことは、「パウロ書簡集」のほかのどの書簡と比べても例外的である。「パウロ書簡集」では、本書以外のすべての書簡で、末尾に簡潔な(1節程度の)祝福の言葉が置かれている。本書簡では、祝福句に接続させる形で長大な賛美頌栄句(25～26節)が置かれている。ただし、新約学者の中には、日課箇所を本来の本書簡に含まれない付加とみなす者もある(一部の学者は、16章全体が本書簡とは別の書簡によるものと推認するが、多くの支持は得られているわけではない)。

・日課箇所は、文法上、3節全体で一文を構成する構文となっている。すなわち、25～26節は、27節の「神(テオス)」与格(=目的格)を修飾する構文となっている。賛美頌栄句が、重層的な分詞構文等によって長い一文として組み立てられる例は、しばしば見られる(エフェソ 1:3～14など)。

・25節「秘められた計画」は、原文ギリシア語では「ミステリオン」。「パウロ書簡」で繰り返し用いられ(ロマ 11:25、Iコリ 2:1,7、4:1、13:2「神秘」、14:2「神秘」、15:51「神秘」、エフェ 1:9、3:3,4,9、5:32「神秘」、

6:19「神秘」、コロ 1:26,27、IIテサ 2:7「秘密」、Iテモ 3:9,16「秘められた真理」)、「黙示録」での4例(黙1:20「秘められた意味」、10:7、17:5,7「秘められた意味」)のほか、共観福音書では「たとえを用いる理由」を告げる箇所「秘密」と訳される用例がある(マタ 13:11、マルコ 4:11、ルカ 8:10)。「ミステリオン」は、ギリシア正教会では「秘跡」を意味する語「機密」として用いられている(対応するラテン語は「 sacrament」)。

・25節「啓示」は、ギリシア語「アポカリュプシス」。「パウロ書簡集」で繰り返し用いられ(新約18例中13例)、「パウロ」思想の特徴的用語の一つとされるが、「ルカ」で一例(2:32)、また、「ペトロの手紙一」(1:7,13、4:13、いずれも「現れ」の訳語)および「黙示録」(1:1「黙示」)にも用例が認められる。「啓示」と「黙示」を区別して違いを強調した解釈をする場合があるが、原語においては区別がない。

・26節「預言者たちの書き物を通して」(ディア・テ・グラフィオン・プロフェーティコン)の直訳は、「預言的な諸文書を通して」。必ずしも、いわゆる「預言書」に限定されておらず、「律法」も含めた旧約正典を全体として指していると考えられる。通常、新約時代のユダヤ教的背景では、旧約正典全体を「律法」あるいは「律法と預言者」と言い表し、加えていわゆる諸書を指して「詩編」を添えることもあったと考えられる。本書簡でパウロは、「律法」の扱い方について議論しており、「律法」を「行い・実践」の規範を示すものとしてではなく、「信仰」の規範を示すものとして論じていた。そのような経緯から、「律法」の用語が誤解されることを避けて「預言的な諸文書」という表現を用いているのかもしれない。IIペト 1:19「預言の言葉」も参照。

福音書日課(マタイ 13章より)

・日課箇所は、主イエスが故郷で必ずしも受け入れられなかったことを伝える逸話で、「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えている。「マタイ」はこの逸話を、13章冒頭の「種蒔きのたとえ」から始まって一連の「たとえ」で教えを語られた主イエスが、その後、続いて故郷を訪れたという設定としている。一連の「たとえ」の教えの狭間には、「たとえを用いて語る理由」を弟子たちに告げたことも含まれており(10～17節)、主イエスの教えに接して「天の国の秘密」を理解する者と理解できない者に分けられるであろうという見方を故郷の旧知の人々にも適用する意図があったと考えられる。また、「マタイ」はこれらの「たとえ」に独自の「独麦のたとえ」を加えており(24～43節)、主イエスの教えを受け入れない故郷の人々に、それ以上の積極的な働きかけをされなかったこと理由として提示することを意図していたとも考えられる。

・主イエスがお帰りになった「故郷(パトリス)」がどの町を指すのか、「マタイ」と「マルコ」は明示していないが、「ルカ」はそれが「ナザレ」であったと明示している(ルカ 4:16)。「マタイ」でも「マルコ」でも、主イエスが「ナザレ」出身者であったことは前提として明示しており

(マタイ 2:23、4:13、マルコ 1:9)、「ルカ」および「ヨハネ」を含めた共通の認識となっている。日課箇所に関して、「マタイ」と「マルコ」が敢えて「ナザレ」と明示しなかった理由は定かではないが、ここで扱われる「主イエスを受け入れない者」の存在が「ナザレ」という特定の地に固有の問題として矮小化されることを避けているのかもしれない。「マタイ」では、主イエスの教えや行動は、復活後の「弟子たちの教会」が規範とすべきものとして明確に位置づけられており、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」(57 節)という句を弟子たちにも適用する意図があるのかもしれない。

・55 節「大工(テクトン)」の正確な実態は知られていないが、通説では「木工職人」と解される。当時のユダヤ・ガリラヤ地方では、ヘロデ家やローマ総督らが主導する大規模な公共工事が盛んに行われており、さまざまな職人は、それらの工事にも携わっていたと考えられている。そのような工事への従事は、当然権力者や異邦人などと接触する機会も多くあり、他方で高収入も期待されたと推認される。故郷の人々が主イエスを「ヨセフの息子」と呼ばずに「大工の息子」と呼んだとされているのは、主イエスの家族が周囲から多少なりとも軽蔑されていたことを示唆しているのかもしれない。

来週の誕生日 (12月8日～14日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-231「久しく待ちにし」(= I 94)は、9 世紀のアンティフォン(交唱聖歌)に基づいて 13 世紀ごろに再構成、18 世紀に現在の形になった。原曲は 15 世紀フランスの女子修道院の歌集に見られる。
- ・21-229「いま来たりませ」(= II 96)は、M・ルターの作詞となっているが、原詞は 4 世紀のミラノ司教アンブロシウスのラテン語賛歌「Veni Redemptor gentium(おいでください、異邦人の救い主)」に基づく。曲も、アンブロシウスの賛歌に付けられたグレゴリオ聖歌を原曲にルターが編曲。ルターの関わった最初の讃美歌集(1524 年)に所収。
- ・21-233「高く戸を上げよ」は、詩編 24:7 に基づいて 17 世紀プロイセンの牧師ヴァイセルが作詞。18 世紀に敬虔派の讃美歌集で現行の曲がつけられて以降、ドイツを代表する讃美歌として歌われてきた。現行ドイツ讃美歌集 1 番。

21-231「久しく待ちにし」

Veni, Veni, Emmanuel

1. Veni veni, Emmanuel / captivum solve Israel, / qui gemit in exilio, / privatus Dei Filio. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
2. Veni, O Sapientia, / quae hic disponis omnia, / veni, viam prudentiae / ut doceas et gloriae. / Gaude! Gaude! / Emmanuel, / nascetur pro te Israel!

3. Veni, veni, Adonai, / qui populo in Sinai / legem dedisti vertice / in maiestate gloriae. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
4. Veni, O lesse virgula, / ex hostis tuos ungula, / de spectu tuos tartari / educ et antro barathri. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
5. Veni, Clavis Davidica, / regna reclude caelica, / fac iter tutum superum, / et claude vias inferum. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
6. Veni, veni O Oriens, / solare nos adveniens, / noctis depelle nebulas, / dirasque mortis tenebras. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!
7. Veni, veni, Rex Gentium, / veni, Redemptor omnium, / ut salvas tuos famulos / peccati sibi conscios. / Gaude! Gaude! Emmanuel, / nascetur pro te Israel!

21-229「いま来たりませ」

Nun komm, der Heiden Heiland

1. Nun komm, der Heiden Heiland, / Der Jungfrauen Kind erkannt! / Dass sich wundre alle Welt, / Gott solch' Geburt ihm bestellt.
2. Nicht von Mann's Blut noch von Fleisch, / Allein von dem Heil'gen Geist / Ist Gott's Wort worden ein Mensch / Und blüht ein' Frucht Weibesfleisch.
3. Der Jungfrau Leib schwanger ward, / Doch blieb Keuschheit rein bewahrt, / Leucht't hervor manch' Tugend schön, / Gott da war in seinem Thron.
4. Er ging aus der Kammer sein, / Dem kön'glichen Saal so rein, / Gott von Art und Mensch ein Held, / Sein'n Weg er zu laufen eilt.
5. Sein Lauf kam vom Vater her / Und kehrt' wieder zum Vater, / Fuhr hinunter zu der Hoell' / Und wieder zu Gottes Stuhl.
6. Der du bist dem Vater gleich, / Führ' hinaus den Sieg im Fleisch, / Dass dein' ew'ge Gott'sgewalt / In uns das krank' Fleisch erhalt'.
7. Dein' Krippe glänzt hell und klar, / Die Nacht gibt ein neu Licht dar, / Dunkel mus nicht kommen drein, / Der Glaub' bleibt immer im Schein.
8. Lob sei Gott dem Vater g'tan, / Lob sei Gott sein'm ein'gen Sohn, / Lob sei Gott dem Heil'gen Geist / Immer und in Ewigkeit!

21-233「高く戸を上げよ」

Macht Hoch die Tür

1. Macht hoch die Tür, die Tor macht weit; / es kommt der Herr der Herrlichkeit, / ein König aller Königreich, / ein Heiland aller Welt zugleich, / der Heil und Leben mit sich bringt; / derhalben jauchzt, mit Freuden singt: / Gelobet sei mein Gott, / mein Schöpfer reich von Rat.
2. Er ist gerecht, ein Helfer wert; / Sanftmütigkeit ist sein Gefährt, / sein Königskron ist Heiligkeit, / sein Zepter ist Barmherzigkeit; / all unsre Not zum End er bringt, / derhalben jauchzt, mit Freuden singt: / Gelobet sei mein Gott, / mein Heiland groß von Tat.
3. O wohl dem Land, o wohl der Stadt, / so diesen König bei sich hat. / Wohl allen Herzen insgemein, / da dieser König ziehet ein. / Er ist die rechte Freudensonn, / bringt mit sich lauter Freud und Wonn. / Gelobet sei mein Gott, / mein Tröster früh und spat.
4. Macht hoch die Tür, die Tor macht weit, / eu'r Herz zum Tempel zubereit'. / Die Zweiglein der Gottseligkeit / steckt auf mit Andacht, Lust und Freud; / so kommt der König auch zu euch, / ja, Heil und Leben mit zugleich. / Gelobet sei mein Gott, / voll Rat, voll Tat, voll Gnad.
5. Komm, o mein Heiland Jesu Christ, / meins Herzens Tür dir offen ist. / Ach zieh mit deiner Gnade ein; / dein Freundlichkeit auch uns erschein. / Dein Heilger Geist uns führ und leit / den Weg zur ewgen Seligkeit. / Dem Namen dein, o Herr, / sei ewig Preis und Ehr.